

過渡期世界の戦争の性格と武装

69. 11. 初頭

1 過渡期世界における

階級斗争の基本性格

① 階級斗争の基本的性格

過渡期世界の階級斗争の基本性格は、國際的階級斗争を世界階級斗争へと止揚する点にある。國際階級斗争すなわち歴史的個別的過渡的限界性をもった今日の世界のプロレタリアートを階級斗争を通して世界単一の階級に組織することである。

最も最高の質をもつて要求されている任務は、民族的階級としてのプロレタリアートの歴史的個別的過渡的限界性を止揚、突破してプロレタリアートを世界的階級に組織することである。すなわち、プロレタリアートの世界独裁を媒介として世界社会主義を建設することだ、今日の過渡期世界の階級斗争の基本性格である。この目的に向けて、世界のプロレタリアートと階級斗争を指導することは口産主義者の目的任務であり、共産主義は、この斗争によつてのみ、プロレタリアートの国境や国語に左右されない総体としての利益

を代表することが出来る。共産主義者その他のすべての潮流、組織の思想、理論、政治として路線をわかつ根本的相違は、この点にほかならない。又、今日の階級斗争とプロレタリアートとは、まさしく、その歴史的個別的過渡的限界性を突破し、自らを世界的階級に組織しつつあるし、組織せずにはおかないのだから、ここに世界史の基本的方向性をもっているのである。

たしかに今日の世界の階級斗争とプロレタリアートとは、バルジョアの民族主義をはじめとする色々な歴史的個別的過渡的限界性をもっている。そこでこの限界性とは、一方でブルジョアジーの支配、収奪、搾取をゆるしている原因、いまだ帝國主義のくびきのもとにプロレタリアートをしばりつけている元凶にほかならないし、他方では、プロレタリアートの世界的国結を阻止し、プロレタリアートの今日的資質の低下、制限されたエネルギーと能力の限界を示しているものにほかならない。

は産主義者の基本的任務は、プロレタリアートのあれやこれやの歴史的個別的過渡的限界性を指摘し、これを説明し、説教することではない。それは、かつてブルジョアジーが封建的・中世的地域主義的な狭い世界を打ち破り、民族国家を形成したのに対して、このブルジョアジーの経済的・社会的・政治的・文化的な一切のブルジョア民族主義の限界・狭さを突破すること、民族国家に固着した資本制生産様式における生産諸関係の障壁を粉碎し、打破することによって、この地球上を唯一の共同社会に、「世界社会主義」に組織することである。は産主義者は、プロレタリアートの欠点・限界性をあれこれとあげつらうのではなく、この偉大な歴史的事業に参加させることによって、この事業を押し進めることによってだけ、プロレタリアートを成長させることが出来るのである。プロレタリアートを世界社会主義（地球上を唯一の共同社会）の建設に参加させることを通して、ブルジョアジーを打倒する過程を経路させることによってだけ、自らの

歴史的個別的過渡的限界性を自覚させ克服させようことが出来るのである。プロレタリアートの世界独裁の樹立を媒体とするこのプロレタリアートの事業は、世界のブルジョアジーに対するプロレタリアートの斗争、この二大階級にもとづく、二つの陣営のあいだの斗争のほかにない。すなわち、ブルジョアジーを打倒する過程をおしただけプロレタリアートは、自らを高め、世界的階級に自らを成長させることが出来るのである。

<2>

②過渡期世田の印反階級における その帝国主義の運動法則

今日のプロレタリアートは歴史的個別的過渡的限界性をもちながらもブルジョアジーに対して国際的な階級斗争として斗争している。そして、この国際階級斗争に規定されて帝国主義の国際国内にわたる反革命同盟は存在している。この反革命同盟は、①帝国主義列強（巨大独占体）、②植民地・後進国の軍事反革命政権（買収資本・民族ブルジョアジー・地主）、③スタ

ーリニスト官僚（労働の質にもとづくブルジョア民族主義・分業の強化拡大、固定化にもとづく官僚の体系によって構成されている。この反革命同盟は、世界のプロレタリアートとその階級斗争に対抗して階級利害にもとづいて結ばれている。資本主義の矛盾・帝国主義の不均等発展は、基本的にブルジョアジーとプロレタリアートとの階級斗争を激化させずにはおかず、これは反革命同盟をますますブルジョアジーに強要せずにはおかない。然し、ブルジョアジー相互の矛盾・対立競争は、その市場をめぐって、不断にこの反革命同盟をつぎくずすにはおかない。しかし、ブルジョアジー相互の、独占相互の矛盾・対立・競争のこのチヨク・緊張関係は、国際階級斗争の存在に規定されて容易に帝国主義戦争へ導くことが出来ない。フニ）

に今日の帝国主義がその市場再分割戦において、反革命を先行させた侵略体制を政治的・軍事的にとらざるをえない原因がある。先行的権力再編・反革命同盟の再編を媒介とした市場再分割・侵略を、今日の帝国主

義の基本的運動法則としていっているのである。このブルジョアジー・独占の階級利害の貫徹形態の特殊性に過渡期世界における帝国主義の基本的運動法則をみなければならぬ。反イデオロギー攻撃、反革命を先行させた先行的権力再編、反革命同盟再編、そして侵略反革命戦争に対する斗争を今日の世界階級斗争の基本軸にすることによって、フニから指導しなければならぬのである。この先行的権力再編、反革命同盟再編を媒介として市場再分割戦、その軍事的形態としてこの侵略反革命戦争に対する斗争を階級斗争の環とすることによってプロレタリアートの国際的階級斗争を単一の世界階級斗争に高めることが出来る。プロレタリアートの歴史的個別的過渡的限界性を止揚することが出来る。

世界革命戦争はこの帝国主義の侵略反革命戦争に対するプロレタリアートの階級斗争、人類史から人類史への一時代にわたる実現形態である。

③ 世田介社公口主義の建設は

口程に答えてみる。

米帝国主義のベトナム反革命戦争を媒介した東南アジア市場への侵略と反革命と、これに対するベトナム人民の革命戦争は、帝国主義下における本格的な階級斗争を生み出した。この一昨年初以降の帝国主義天下の階級斗争のはじまりとは、一方で帝国主義列強の同時打撃を世界のロレタリアートの中心的任務にあしめると同時に、他方において、帝国主義に対する「自国政府打撃」の斗争を史的目標にのぼせただのである。そして、この自国政府打撃と帝国主義列強の同時打撃こそ、オニ次大戦以降、特に近年以降の資本主義の高揚によって生れつといたを現わすルジヨア民族主義の発露とともに「労働者国家」「帝国主義」「前進諸国」の、いわゆる三スロツクのそれ以外の階級斗争の三つの形態を統合し、統一的に斗い指導するべきことを要求したのである。

2 「自国政府打撃斗争」の今日的課題

① 内乱のはじまり

帝国主義列強同時打撃の斗争、そこに於ける自国政府打撃斗争の位置づけについては別の機会にのべることにして「三では「自国政府打撃斗争」を日本に於ける我々の任務との関係で明らかにする。

自国政府打撃斗争は、日本の社会主義者とロレタリアートにとって基本的な任務であり、この斗争を系統的に、計画的に斗うべきである。

ところで、この政府打撃斗争の中心は、なによりも、帝国主義列強の解体である。自国政府は、日本の独占の国内外に於ける支配の中心であり、この自国政府に対する「三」は、一方で、ロレタリアートはまづこゝに日本の「ロレタリアート」の利害と斗争である。

今日、日本帝国主義政府は、その「侵略・反革命・抑圧」の中心環を国内外に於ける反革命を中心としてすべての先行的な再編、帝国主義的社会再編、そして反革命同盟の再編を行なつてゐる。

従来の二つしたるロレタリアートの史的・政治的過渡的限界的止揚を目標にのぼせたのである。

帝国主義の侵略反革命戦争に対するるロレタリアートの世界階級斗争、世界革命戦争は一方で民族国家の廢絶を目標にのぼせているだけでなく、他方では、るロレタリアートの世界的な民族主義的中央集権、るロレタリアートの世界独裁をるロレタリアートの当面の任務にのぼせたのである。この二つで、一つの原則、「民族国家の廢絶」と、これをるロレタリアートの世界独裁（世界の民主主義の中へ中央集権の樹立こそ、帝国主義の侵略反革命戦争に対するるロレタリアートの世界革命戦争の目的であり、又結果に於けるからない。資本制生産諸関係を粉砕し、資本制生産様式にとってかわる社会主義的生産様式の建設の課題を、帝国主義の政治的動向と、これに対するるロレタリアート階級斗争の現身形態が今日、社会主義者としてるロレタリアートにもたらしたのである。世界社会主義の建設は、遠く未来のことではなく、いらいの今日の課題として、目標にのぼつたのである。

一方、日本から極東、東南アジア、太平洋への安全保障条約の拡大（アジア安保）、沖縄を飛頭小とする防衛保障は、日本帝国主義の侵略反革命の本格的準備をはじめ、他方国内においては、自国政府の治安体制の整備、パードをはじめとして公然と大衆斗争、社会主義運動に対抗しはじめた。この自国政府の準備は、直接侵略、間接侵略に対する防衛強化とつた、オニ次大戦は、一ノミズとは異なつたものにうつつとしてあり、又、他方松尾は70年代に於ける「ルシヨア」の反革命路線を描いてみせた。

日本帝国主義の侵略反革命は、直接侵略、間接侵略に対する防衛強化の必要をかりて公然と進められており、自国政府は、独断が一体となつてこれを進めている。つまり自国政府の国防体制、陸軍50万、沖縄を侵略反革命の前進基地化するための海軍の増強、空軍の戦闘範囲の拡大と強化とは、陸海空をまづしく侵略反革命軍隊にして質的に強化飛躍させるものにはかならない。

今日、自由政府打倒斗争の中心環は、この自任隊の侵略
反革命軍政化に対する斗争であり、この帝国内軍隊の解
体をとおしての實現することである。そして、この一
とは、全人民をまことに政治的奴隷と「侵略武装」か「自
任武装」か「非武装」か、それとも「全人民の武装」かと
めぐって争っているのである。而してこれをめぐる根本問
題は二つあり、一つは提議されているのであり、それ以外
ではない。日米安保条約の「自動延長」か「長期固定化
か」「段階的縮小」か「廃棄」か等々の問題は、現在の日本の
階級斗争にとっては本質的問題にはかゝらない。

いいいいは、現在すくなくとも、この階級斗争の新しい
段階が、あるいはこの政策阻止斗争ではなく、まことに
く「政府」そのものの打倒斗争として斗争しなければなら
ないことを明らかにしてきた。

最も重要で根本的なことは、このはじまり出した階級斗
争の新しい段階が、あるいはこの政策をめぐる争いではなく
どのような政府をいかにつくるべきかという問題が、
「侵略武装」、「自任武装」、「非武装」、「全人民武装」とい

わかれのすべての政治の前提、大前提にはかゝらない。

「全人民の武装」、「自任武装」、「非武装」、「常備軍の
廃止」、「帝国内軍隊の解体」こそ、これが全人民者同
盟の政治政策の基礎である。

同盟のオースティン任務は、すべての大衆と大衆的私、大衆
斗争において、このプロレタリア階級の原則を貫徹するこ
とである。オースティンに、この原則をいかにいかに、主張す
るだけではないのであって、全人民の武装をいかにい
かの行動の基準とする、武装を實現することである。

「非武装」といかにいかにいかに、いかにいかにいかにいかに
を主張するまことにこの争いではなく、いかにいかにいかに
彼らは武装しないまことにこの争いである。オースティンに、「自
任武装」派に対する補正として常備軍、大衆的斗争を公
然と主張すること、これが重要である。誰からの自任か、
何のいかにいかに、この争いをはっきりさせる。今日「自任
武装」派は二つの潮流がある。一派は、国防白書の二つとく
革命に対する自任、反革命武装であり、これは「直接侵略
間接侵略」に名をかりて押し進められている。10・21の村

つかたちで、まことに「武装」をめぐって斗争ははじめた
こと。この「武装」をめぐって人民のあいだの了解がはじ
まっているといふまことにかゝらない。

いかにいかに内乱のはじまりを公然と宣言しなければなら
ないのはこのためである。

② 武装をめぐる斗争

非武装は内戦外として、まことに今日の政治斗争が「侵
略武装」か「自任武装」かそれとも「全人民の武装」かと
いう根本問題をめぐって斗争ははじまっていること、そして、
この「武装」をめぐって斗争こそ、武装とその行使（或
く争）、武装の目的とその政治的本質としての国家権力（政
府）をめぐる二つの問題を提議していることである。

戦争に対する全人民者の態度、「政府内閣」（国家権
力）をめぐるいかにいかにいかにいかにいかにいかにいかに
することなくして、今日の政治斗争を語ることはできなく
なっていることである。内乱をめぐる根本問題は、侵略武
装、自任武装に対して全人民の武装をいかにいかに主張する
点にあり、この主張を公然と主張、宣言、宣言することが

動機も、自衛隊も、まことに、この革命に対する自任反
革命武装の現われの一つに月分がかりいしてその一部分の現
いにはかゝらないことである。もう一派は日本共産党をばじ
め右翼を含めて、米帝国内に對する日本人民の自任権の
要求といふまったく馬鹿げた主張である。現に日本帝国内
には武装していることであり、マ米帝国内には日本の反革命
武装を要求していることである。彼らの「自任武装」の承認
要求は、誰の目にも明らかである。日本帝国内の反革
命武装とまったく同じものであることをはっきりさせる、こ
れと斗争ははじまること。

オースティンに、この「自任武装」との斗争をより正確に見れば
わかること、現実には、この自任が、反革命武装、革命
に対する自任に名を借りて帝国内の反革命武装にある
こと、そして、この反革命武装こそは、日本帝国内の「侵
略反革命戦争」の準備、先行的暴力再編成、帝国内の社
会階級、反革命同盟階級を中心環をにがうてあり、その基
礎としていふのだ。

3 帝國主義の侵略と革命と世界革命戦争に

転化せよ。

さて、武装は、戦争を前提とし、又、結果とするものであつて、武装の進行は、必然戦争をもつてこそなされるに開けがたい。又進んでいるといふことである。ここに、武装と革命との基本的関係がある。

今日我々が直面しているこの武装と革命の関係は、戦争に対する資本主義者の原則的な態度を要求している。

すでにいひいたが「内乱のけじまり」として主張しているのは、今日の武装が、革命に対する反革命戦争、反革命に対する革命戦争として進んでいること、いや、もっと正確にいへば、この革命と反革命の戦争が、帝國主義者、反革命武装の強化を遂行し、又、いよいよ革命の武装（全人民の武装の強化を要求しているといふこと）の現実をかため、いよいよ、すべて今日進行しつつある階級戦争と、階級戦争となるのだ。いよいよが直面している戦争の根本が、ここに在る。

戦争に対するいよいよのオ一の原則的立場は、革命と反

革命の戦争、階級戦争、全人民の武装にもつて自己帝國主義政府の戦争、「内乱」がいよいよの原則であり、立場である。

ところで、この革命と反革命の戦争は、日本帝國主義軍隊の解体を伴ふとするが、この侵略、反革命戦争の強化、反革命を推し進めているのは誰か？ そいはい、三井を中心とした巨大財閥であり、岸、佐々木、福地を中心とした自民党勢力であり、コスツル、ザ、三井を旗印とする三井、住友も同様である。

いよいよの帝國主義軍隊、侵略と革命の解体の斗争は、この巨大財閥の解体、収奪、自民党政府崩壊の斗争である。この標的に向け、斗争の対象を定め、全人民の武装をせよといふこと、そして自民党政府、巨大財閥としての自民党の必死の反革命と打ちやがることが、反革命に対する革命戦争の日本における任務である。

自己政府の解体、自己帝國主義の解体、自己帝國主義の崩壊、侵略と革命戦争の斗争、これが、今日はいよいよである戦争の日本における戦争の政治的任務、目的である。

オ二、この戦争は、決して二回の戦争によつて勝利するとは出来ないことは、革命と反革命が、世界スリットリアジーンに対するスロレタリアートの二大階級の間の、二つの階級のあいだの戦争であることである。すなわち、自己政府の崩壊の斗争は、世界帝國主義の「侵略と革命と世界革命戦争に転化せよ」という共通の二つのスローガンのもとに、世界スリットリアートの一部分、一環、一打収奪要素として進んでいくことは、はじめて勝利することが出来るのである。

三、我々の戦争に対するオ一の原則的立場がある。

このオ一の原則、スロレタリアート主義の原則とオ一の帝國主義の下における「先進階級」の自己政府の崩壊の斗争とを矛盾したものではなく、オ一の原則は、すべてオ二の「スロレタリアート主義」の過渡期世界という現段階の原則の一部分である。「帝國主義の侵略と革命と世界革命戦争に転化せよ」そのために、帝國主義者に対する日本の「スロレタリアート」は、「自己自己政府を打倒せよ」、「帝國主義軍隊、侵略と革命戦争（自己自己）を解体せよ」、「独占体（三井・三井・住友）を収奪せよ」

オ三に、帝國主義の侵略と革命戦争と、そして二回と反革命同盟を結んでいく植民地、先進地の軍事と革命政権・地主・買収資本・民族スリットリアジーンに対する、いよいよ自己政府の崩壊の斗争は、人民解放、社会主義の革命運動を支持すること、さらに、この今日の戦争に対するオ三の原則である。

帝國主義の「スロレタリアート」侵略と革命戦争を媒介とした東南アジアの市場割当てと、二回に対する「スロレタリアート」の英雄的革命戦争が、全世界の「スロレタリアート」の帝國主義の列強を打ち倒すとする世界の反革命同盟運動に向けて進んでいく。よつに、全ての「スロレタリアート」人民が、このオ三の原則を支持し、承認し、進んでいくことは、今や必然であった。オ四に、バトナム戦争は、かつての朝鮮戦争とともに、「自己自己政府」の自己自己運動、社会主義運動としてある革命戦争に対する帝國主義の反革命侵略戦争に対する「自己自己政府」の自己自己手段とする革命戦争、社会主義を支持する戦争と世界の「スロレタリアート」が断固として支持承認することをはたした。それは「自己自己政府の自己自己」に制

形で提出しなければならぬ。

オ三に、二が決定的に重要であるが「武装闘争」における全人民の武装を、この「政府打倒」と結びつけて提出することである。即ち「侵略と革命武装の推進者、自衛的政府を打倒せよ」「侵略と革命武装を目ざす御方の秘策」といった形で提出することである。

オ四に、いよいよ戦争に対する4つの原則と結びつけて「政府打倒」の性格を鮮明にすることである。

以上が戦争と後一戦線の程度によって決まることであるが、重要なことは、自衛的政府の性格と、そのように立てている基礎である御方と武装と戦争の基本性格から、つきりとさせて提出すること、二に、いよいよ「政府打倒」に代わる立場、他の潮流と自分とを分かつ基本性格と、政治要求の内容をけつきりさせることである。

② 臨時革命政府の樹立

しかし、こうして「政府打倒」の要求とその政治性格はまだ、あいまいであり、豊饒として、はききり者け「政府打倒」を打倒し、とめるのではなく、スロレタリアー

トが、現行政府を打倒して、どのような政府をつくりたいのか、かといふまで深めない限り、はききり者が、他の全ての政治潮流なり、スロレタリアーをきり、正しく指し示すことは出来ないのである。オ二に、いよいよ「政府打倒」を不当に実現しようと思えば、現行政府のあれやこれやの又、基本性格をあげつらっているだけでは足りないであつて、わいり人が現行政府を打倒した場合、どのような政府をつくるのかといふ問題にききりないわけにはゆかない。この問題を提起するものは政府だけであつて大衆団体はこのことは期待するわけにはいかない。当面、わいり人は、この問題をたゞとて不十分であつたとしても、「臨時革命政府の樹立」の要求として提出しなければならぬのである。このことを認めようといふものは、本當に「政府打倒」を實現しようといふものではなく、本當に「政府打倒」を實現しようといふものだけである。オ二に、この「臨時革命政府の樹立」の要求を、当面、まず何よりも上議の武装闘争と、戦争問題としてまとめ提出することであり、はききり者同盟も、もし大衆が望むならば、政権をとる用

意があること、政権を維持する能力を、わいり人は、ききり者同盟だけが持つて、いることを、断固として宣言しなければならぬ。わいり人が国家権力を握り、二を維持することとは、もしスロレタリアーが二の力を奪み、又、全面的に参画し、政治、社会、経済、の諸権利を掌握する用意があれば、いよいよはききり二のスロレタリアー独裁権力を維持せしめるだろうことを公然と宣言しなければならぬ。「臨時革命政府の樹立」の要求と二のような形で提出することである。

オ三に、二の政府の樹立が、何故スロレタリアーの全面的な参加によるものであつたとしても「臨時革命政府」にならざるを得ないのか、何故完全な政府と「くる」ことが出来ないのか。このとき今日の戦争に端的にあらわすには、わいり人が世界の現段階を説明すること。

過渡期社会における革命と社会の建設が何故「世界を口」に、にもとづく「世界社会主義」でなければならぬのか、といふことを明らかにすること。

単なるスロレタリアーが自行隊と粉砕した場合、米、ソ

の、革命干渉戦争の不可避的な現象を説明するだけでは不十分であつて、資本主義が、いやもつと長く、階級闘争の全史過程と、特に帝国主義の不均等発展がもたらした、またらしたつある世界の経済、社会、政治の現状といふ、今後何故一時的な社会主義の建設を困難にして、世界社会主義だけが、富と貧乏の世界的不平等、社会発展の不平等、精神労働と肉体労働、世界の都市と農村との、そして民族国家に固着している資本主義諸国家の打破の不可避性、生きた消亡の労働と消亡のしかた、すなわち資本主義様式にとつてかゝる社会主義的主義様式の世界的に説明する必要性がある。そしてスロレタリアーが世界的に団結するならば、大衆の發達の今日の段階が世界社会主義を可能にするのだ、といふのだ、といふことを説明し、当面我々が、つくる能力問題が、なぜ「臨時的なもの」でなければならぬのかを明らかにすることがオ三番目に重要である。

亦四に、わが共產主義者同盟だけがそのような未来の社会、世界プロ独と世界社会主義と世界共產主義を明かにしようとしていること、プロレタリアートの世界組織を検討しつつあること。そして世界プロ独がどれほど困難であろうと、歴史はこれ以外に解決の道をもっていない以上、他の諸国の労働者、全この民族と全この民族の労働者が共同して、この困難な任務をまっとうしなければならぬこと。そして我々は、このことを承認するどんな民族・人種・国家・労働者・人民・個人をもつけ入れ、又共に努力するだろうことを謙虚に訴えることである。

以上が「臨時革命政府」に対する我々の原則的な態度である。

③全工人の武装

わが共產主義者同盟は、プロレタリア独裁を基本的な結果点としている。然し、プロレタリア独裁の問題は、政治一般としてではなく「プロレタリアー

トの武装」「全人民の武装」の問題として提出するためには、まず何よりも党が武装されなければならないこと、軍事を指導する党にならねばならないことである。すでに10月以降、なかんづく428以降、我々が基本目標としてきたことであった。東大斗争前後のキム（女青）の結成はその一歩であった。

然し、キムの結成をめぐって、その組織性格をめぐる議論があった。それは、キムに大衆的性格をさせるのか？、それとも戦斗性としての性格をもちたせるのか？、というものであった。そしてキムは党の直轄する大衆的組織として結成されたのであった。然し、まさしく東大斗争によって切り開かれた局面は、党が予想する以上に巨大な大衆の高揚、武装（バリケードとゲバ棒とビン）を一挙に促進したのである。このことによってキムは、その大衆的性格によつては決してこの新しく生まれる武装集団を組織し、指導することはできなかったのであった。428に向けてこの

「突撃隊」の結成をめぐる討論はまさしくこのキムの陥穽に陥つた危機をどのように打破するかにあったし、「軍事」を指導する党になるために、党が革命されなければならぬこと、党が武装されなければならぬこと、というのであった。まさしくこの「キム」と「突撃隊」をめぐる問題、又党の武装・革命をめぐる問題、特にキム、突撃隊の同志から提出されて来た問題であった。この間の党内斗争、党派斗争の根本問題はここにあったし、決して戦術をめぐる論争ではなかった。同盟が、キム・突撃隊の同志諸君から提出されたこの問題に充分答えることができないまま躬し、赤軍系の結成においてんだことを自己批判しなければならぬ。我々はこの教訓を踏まえて軍事を指導出来る党に飛躍する試みをつこの赤軍との分裂以降努力してきた。それはプロレタリア独裁の問題を思想から政治へ、そして武装、軍事へ貫徹することと同時に、この武装・軍事を要求するプロレタリアートの政治的要求を提出するという任務を同盟が果たさねばならぬ

ということを意味している。全人民の武装は、同盟がまずもって自ら軍事を指導すること、そのために要求されるより高い政治的質にもとづく団結を行なうこと、この二つの実現からはじまっていることをはっきりさせなければならぬ。より高く深い政治的質にもとづく党の新しい団結形態としてのみ、軍事を指導する党が生まれるのである。この党の新しい団結の質とこれに主導された団結の形態を問題とせず、従来の党の質に基づいて、又従来の団結の形態に手をふれず、軍事を組織した場合、軍は組織することができないか、又はこの軍事はブルジョア的・小ブル的性格、要素、分子を、ひいては権力のスパイをその組織にもぐりこませてしまい、事前の弾圧に二相打尽に弾圧されるか、又は権力に利用されることになるのである。

我々が軍事と軍隊を組織する場合、決定的に重要なことは、わが、この軍隊と軍事の政治的質を決定してかからねばならないということである。この政治的質は九回大会で確認され、上記の政治と戦争に対する

る原則的立場によつて規定された我々の路線によつて定められねばならない。

次に、九回大会はこれに基づき「全人民の武装」を、

①「政府中枢への大衆的武装攻撃斗争」（正面对峙）②「権力再編を媒介に、警察・自衛隊・米軍とのパルチザン戦争」、③「占拠・拠点政治ストをパターンとしたマツセンストの戦略的実現」（根拠地）の三つを「日本におけるソヴィエトの戦略的形成」蜂起への道すじとしたのである。そして、「この三つが融合したものととして」「全人民的武装蜂起」は克ち取られること、この「正面对峙、パルチザン、根拠地は一つに統合し」「蜂起機関」権力機関としてソヴィエトを樹立する」「ソヴィエトの戦略的形成、蜂起の道すじ」とした。（その組織については九回大会を参照せよ。）④自民党政府打倒斗争をめぐる潮流と今日の自民党政府打倒斗争には、いろいろの政治潮流がごみ合っているし、このいろいろの政治潮流をなくしてしまふことはできないことではない。自民党政府に対するクーデターそして中間政府が、この政府打倒斗争の時代には我々の

臨時革命政府の要求とともにあらわれなくてはならないのである。

現行政府に対する政府打倒斗争は、左からの臨時革命政府を要求させるとともに、右からクーデターをも、

そして又全人民の武装を断念したテロリストのクーデターによる臨時革命政府樹立の試みといった形で、諸々の動き、潮流がこの政府打倒斗争には生み出さずにはおかない。又、自民党ニューライトを中心とした中間政府構想、民社、公明、又共産、社会をはじめとする野党の「中間政府」の試みが、この運動の過程に立ち現われずにはおかない。我々の政府打倒斗争は、当然こうしく

に反革命を含んだ運動、要する、分子を不可避的に生み出さずにはおかないのであり、これを恐れていては何もできないのである。我々は、この政府打倒斗争の過程において

こうした潮流と自らを区別し、これらとの党派斗争を不断にくりかえし、続けねばならないのである。そして、

誰が真にプロレタリア人民の利益を代表しているのか、侵略、反革命をめざす独占と誰が斗っており、誰かにせものかをはっきりとさせねばならないのである。

この「クーデター」と「中間政府」をめぐる問題が、この政府打倒斗争の全過程にわたる党派斗争の基本である。

社会主義学生同盟

関西地区委員会 発行

カンパー 〇〇円